

特別寄稿

伝統文化の集いから  
日本刀の奉納へ  
和氣 邁すくも



和氣事務局長と加藤慎平氏

ある日の懇親会の席上で、矢板には伝統文化・伝統工芸に秀でており、全国的に活躍しているエキスパートとして、宮大工の小川三夫氏や書家の柿沼翠流先生、そして日本刀の製作者の加藤慎平刀匠の話題になりました。いまやテレビなどでは、若い女性に人気があるなど日本刀が注目されていますが、全国的に著名な加藤慎平刀匠の技や技術を發揮する機会が少ないことを聞き及びました。

そんな時、日光東照宮の四百年式年大祭の記念事業として、新宝物館が建設されることとなりました。この記念事業の一環として奉納

納刀の献上を企画し、加藤慎平刀匠に制作を依頼することによって、氏の本領を發揮することができると、そして、それが一般市民の認識にもつながり、活躍も増えるのではないかと、奉納刀実行委員会を立ち上げることになりました。

おかげさまで、最終的に百名の実行委員と千二百六十八名の協賛者により、三百二十二万八千三十八円の協賛金が得られ、経費を差し引き三百万円の支援金を加藤慎平刀匠に渡すことができました。関係者の皆様

遠藤市長をはじめ、市職員の皆様にも「市内に立派な伝統文化の継承者が居ることを広報の特集や伝統文化の講演会を行うことにより、内外に矢板の文化のレベルの高さをアピールしよう」と、大変ご協力いただきました。



\*この写真は特別許可をいただき撮影したものです。

完成した奉納刀は、奉納刀協賛金芳名簿とともに、十月十三日午前十時、日光

東照宮祈禱殿にて奉納式の座上、稲葉宮司様に手渡され、日光東照宮新宝物館に展示されました。

また、奉納に先立ち、九月七〜九日の三日間、市役所一階市民室特別コーナーにおいて、奉納刀の一般公開をいたしましたところ、約七百名の参観者を数え、奉納刀の関心の高さを痛感

東照宮五重塔に到着し、八十四名でしたが、最終日の東照宮では七十五名でした。東照宮五重塔に到着し、

本隊コースは赤色と青色の二隊に分かれ、それぞれ

が先頭と後尾にのぼりを立て、東京日本橋を出発、川口宿、岩槻宿、栗橋宿、小山宿、宇都宮宿、今市宿、東照宮と日光社参の各宿場をたどりながら歩きました。

日光社参ウオークに参加して  
田上 孝さん（六十五歳）



徳川家康の四百回忌に合わせ、徳川歴代将軍が日光東照宮までの約百五十kmのルートをたどる「日光社参ウオーク」。その本隊コースに参加した田上孝さんにお話を伺いました。

参加しようと思ったきっかけは



まずは完歩おめでとございます。ありがとうございます。私は十月二十四日から連続した七日間で江戸から東照宮まで歩きましたので、日にちごとに「完歩証」を貰いました。出立のときは、

宇都宮から日光（東照宮の標高六百二十m）へは緩やかな登りとなりますが、きついとは感じませんでした。マラソン大会にも参加してはいますが、それと比べるとずっと楽でした。

沿道の声援は 本隊コースは赤色と青色の二隊に分かれ、それぞれ